

# フレデリック・アシュトン研究 作品に見られるテクニックのアシュトンスタイル への試論

早稲田大学大学院 大蔵 昌

アシュトン作品について語られるときにしばしば見られる表現として「イギリス的である」「独自の音楽性を持っている」「同じ素材の繰り返しの使用」「主題は愛などの些細なこと」などが挙げられる。また、それを示すように、アシュトンの音楽性への嗜好がアクセントやタイミングに現れていること、フレッド・ステップに見られるように同じモチーフの繰り返しの使用を好んだこと、主題は壮大なテーマを扱うというよりは感情をダンスで表現するためのきっかけになるようなものを選んでいくことなどがこれまでの研究で明らかになっている。それでは、テクニックの特徴はどのようなものなのだろうか。昨年はテクニックの特徴をチュケッティーの影響という観点から考察した。

Vaughan は「アシュトンのパブロワやカルサヴィナへのあこがれ、マシーン、ニジンスカとの仕事、チュケッティー・システムの研究がテクニックの基礎として貢献しておりイギリス・スタイルにエポールマンのより大きな自由 *greater freedom of épaulement*, 方向のより素早い転換 *faster changes of direction*, 動きの振幅 (の大きさ) *more amplitude of movement* を与えている<sup>1</sup>」と述べている。確かにアシュトンの作品の中にはこのような言葉で表されるような動きやポーズを見ることができ、アシュトンのテクニックの特徴を表していると捉えられるが、具体的にどのようなことか彼の記述では明らかにされていない。

そこで本稿の目的は、アシュトンのテクニックの特徴を具体的に示し、テクニックのアシュトンスタイルを明らかにすることである。その方法として、まず Vaughan の言葉に沿ってアシュトンらしいと思われる動きの抽出を試みた。1 エポールマンの大きな自由、2 方向の素早い転換、3 動きの振幅の大きさ、にそれぞれ対応すると思われる動きやポーズをまとめた。今回はアシュトンがイギリス人として初めて振付けた全幕物である『シンデレラ』(1948) を取り上げた。プロコフィエフの音楽によるものはザハロフの振付でポリショイにより1945年に上演されたのが最初で、翌年キエフではセルゲイエフの振付のものが上演された。アシュトンはこのロシアのものの一つを見た Morley より話を聞き、自身が振付けるにあたっては3幕の王子が各国を回る場面の省略などを決めた<sup>2</sup> が実際に舞台を見たわけではなく、先例が振付自体に影響したとは考え難い。従ってアシュトン

のスタイルを見るのには適していると思われる。役柄が振付に影響する面も考えられるが本稿では純粋にテクニックのみを抽出して考察する。次に、特に3についてアシュトンのほかの作品にも見られる共通の特徴を挙げてそれを考察する。

『シンデレラ』の動きやポーズの特徴は1肩を回したり、上体をひねったり、横に曲げたりするような動きやポーズが多い。／2パ・ドゥ・シャ、アンボアテ、ソー・ドゥ・バスク、ジュテ、フェツテ、パロテ、パ・ドゥ・ブレ、ピケ、クペなど単純なパに上体や腕の使い方と共に方向転換を多用することによって変化を与えている。／3首(頭)を大きく動かしたり、上体を反らせたりかがんだりする。1の例はバレエの基本的なポジションより後ろに引いたアロンジュ、動きの外周の大きなポールドブラ、アン・オーで一方の肩を引き体をひねるポーズなどである。妖精のパリエーションに見られる上体をくねくねさせる動きもこれに入れることができる。2はパ・ドゥ・シャの動きで半回転し後ろ向きになりもう一度して正面に戻る、またはパを終えた後その進行方向とは逆に走り出す、デトゥールネで繰り返し前後に振り向く(この時の手はブレパレーションなしで最短距離でアン・オーへ) などである。またフェツテ・アン・ナラバスクなどの多用も素早い方向転換の例である。3の例はスターの群舞に見られる上体を大きく反らせたり、前に大きくかがんだりすることや頭を完全に後ろに落とすくらい真上を向くことである。その状態でのアラバスクや手を正面でクロスしたポーズ、アチチュードターンも見られる。またグラン・パ・ドゥ・シャやグラン・ジュテ・アン・ナバンのときに脚を開くことより上体を反らせることに重点が置かれている。このときにも真上を向くことがあるが、これらは全て頭と脚の平行のラインを作り出している。

さて、3の例のようなアラバスクなどは他の作品にも見られる。そこからいえるのは、アシュトンのテクニックには中心軸の意識があまり感じられないということである。つまり、垂直志向性が弱いということである。アシュトンのテクニックに対する考えでは垂直志向性よりも柔軟性のほうを重視していたといえる。本稿では『シンデレラ』とほか数点の資料を取り上げることとどまったが、アシュトンのテクニックの特徴の一つとして、非垂直志向性の動きが見られることを指摘することができる。

<sup>1</sup> Vaughan, D. (1995), *Ashton Now, Following Sir Fred's Step Ashton's Legacy*, edited by Stephanie Jordan & Andrée Grau

<sup>2</sup> Vaughan, D. (1997), *Frederick Ashton and His Ballets*, London, A&C Black. P229